

ヴァナキュラーからの変換の意味 (トルコ建築都市ワークショップへ向けて)



連 健夫 建築家

7月にイスタンブールで開催されるUIA大会に合わせ、JIA及びトルコドコモの協力を得て、トルコ建築都市ワークショップが行われる。その意味は何か。建築と都市を考える上で、ヴァナキュラー（地域性・土着性）の視点は、トップダウン的価値観を持つ近代建築や都市計画から、ボトムアップ的価値観への移行という意味において重要である。機能性、効率性、工業化という普遍性を追求したトップダウン的価値観は、戦後復興や経済発展の意味において、その役目を果たしてきた。しかしながら同時に様々な問題も生み出してきた。すなわち、どこにいても同じような街と景観が、日本のみならず世界の近代都市に次々に出現し、無国籍かつ無機質になったことである。これはエリート意識を持つ施主のニーズと作品を生み出した建築家のトップダウン的思考が共鳴し、増長してきたとも考えられる。

そこで今、求められるのは「ヴァナキュラーからの変換」の視点である。各地域には個々の地域性、土着性がある。たとえ歴史や文化の層が薄いと思われる地域でも、その範囲を広げることや見方を変えることによって、そのコンテキスト（前後関係、文脈）の特徴は必ず見出せる。つまり必要なのはその特徴を見出す姿勢と眼力である。もちろん、そこには見出す力だけではダメで、そこから何か新しいものをつくる建築家としての創造力が求められる。その姿勢で生み出されるものは、独自の価値観による作品ではなくヴァナキュラーというサステナブルな価値観における創造性であるため、文化の創造にも結びうる。この考え方は建築におけるモダニズム以後の概念主義、コンテクスチュアリズム、ナラティブ（物語性）といった多様な建築思潮にも同調する。つまり空間構成を主体としたクライテリア（評価軸）から、そのものの意味を主体としたクライテリアへの移行である。いくら機能的で美しいと言っても、住み手や地域にとって意味の無い建物であれば無価値であるという捉え方である。また都市計画においても、従来の行政主導によるトップダウンの都市計画から市民参加の街づくりというボトムアップの都市計画への移行という動向にも同調する。もちろん、この考え方は、新たな設計条件を自ら増やす行為であるため、設計者には負担が強いられる。つまり、従来のハードな条件に、ヴァナキュラーの調査・分析という行為や街並や環境を考察する行為や文化の創造についての検討などソフトな条件が加わる。従って、これらは建築家のモラルや姿勢に委ねられている。

我々はこの問題意識の中、ヴァナキュラーを見出す眼力とそれを変換できる創造力を獲得することを目的とし、海外でワークショップを続けてきた。異文化の体験が大切であると考えたからである。そこには客観性の意味で、現地の建築家の協力が不可欠である。1998年に行ったマレーシア・シンガポールのワークショップではウィリアム・リム氏とジミー・リム氏にお世話になった。ヴァナキュラーの意味について植民地時代の前後を考えることの重要性を説かれた。韓国でのワークショップ（1999）ではミン・ヒュンシク氏の協力を得た。儒教思想と近代化の狭間における視点を提供してくれた。2000年のブラジルではブルーノ・パドバノ氏の協力を得て現地の建築家達とフォーラムを行った。多くのクライアントがエリートとしてのモダニズムを求めている実情が浮き彫りとなった。2002年のインドのワークショップではラジ・レワル氏にお世話になった。近代化の中にもインドの多様なアイデンティティを求める建築家の苦闘を教えられた。さて今回のトルコワークショップではセムラ・アンデュル氏とエルドゥズ・サルマン氏の協力を頂く。修復建築家であるが故に、保存や再生におけるヴァナキュラーの視点を提供してくれるであろう。

最初にヴァナキュラーの調査・分析をアンカラ、カッパドキア、コンヤ、アンタルヤ、バムツカレ、エフィソス、イズミールという歴史的、政治的、社会的、地理的に特色ある街で行う。そこで見出したコンセプトを基に、ヨーロッパとアジアの文化の接点に位置する大都市：イスタンブールをフィールドにデザインを行う。現地建築家のアカデミックで実践的な知識と共に、生きたヴァナキュラーを体感する。そして随行講師による刺激とアドバイスの中、参加者の創造力によってプロジェクトが発展し成就する。現在、UIA会場の発表や交流会も企画中で、魅力的なプログラムができあがりつつある。是非、学生、若手、ベテラン問わずご参加いただき、自らを開拓してもらいたい。ワークショップは体験しないと分からないが故に、効果と満足感は大である。参加者の個性あるプロジェクトに請うご期待！

※1、期間：6/29～7/10、費用：28.5万円、募集人員：20名、「建築家4月号」の案内参照、詳しくは（有）連健夫建築研究室 <http://www.muraji.jp/> 過去のワークショップの小冊子の残部があります。ご希望であれば御注文いただけます。



オスカー・ニーマイヤー設計のサンパウロ大学校舎訪問、中央がドバノ氏（ブラジルワークショップ2000）



ムンバイ建築学校での発表会、左から3人がカラングロ・バー氏（インドワークショップ2002）

連 健夫（むらじ けんお）

ゼネコン10年勤務の後、1991年渡英。AAスクール留学、AA優等学位取得の後、同校助手、東ロンドン大学非常勤講師、在英日本大使館技術顧問を経て96年に帰国。（有）連健夫建築研究室を設立、設計活動の傍ら、海外にてワークショップを続けている。著書：イギリス色の街（技報堂出版）、対話による建築まち育て（共著、学芸出版社）、作品に「白鷗大学おもしろライブラリー」「つづきの家」など。